様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８４０８７

研究課題名（和文）寺院資料の基礎的な調査・研究に基づく中世説話研究の再考―真言寺院の口伝・説話―

研究課題名（英文）Reconsideration of research on medieval narrative narratives based on foundational survey and research on temple materials - oral transmissions and SETSUWA from Shingon temples

研究代表者
佐藤　愛弓（sato, ayumi）

天理大学・文学部・准教授

研究者番号：５０４６０６５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、寺院資料調査を基盤として、そこに記された口伝・説話を収集し検討したものである。日本の寺院にはいまだ調査されていない資料が多く蔵されている。その中には師から弟子へと教えを伝えるにあたり語られた多くの口伝・説話が記されている。本研究ではそれらを収集することによって、寺院社会において口伝・説話がどのように機能していたのかを検討した。これらの検討によって説話とは何か、あらたな説話像を提示できたものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study, which is based on a foundational survey of temple materials, examines oral transmissions and narratives collected therein. There are still many documents that have not been investigated in the collections of Japanese temples. Many oral transmissions and narratives of teachers to their have been recorded in these materials conveying the teachings to disciples. By collecting them in the present study, I examined how oral transmissions and narratives were functioning in temple society.
This examination presents both an answer to the question of what a SETSUWA narrative is, and a new image of medieval narrative.

研究分野：日本中世文学

キーワード：中世文学　説話　寺院資料

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者はこれまで鎌倉末期から南北朝期に活躍した真言僧栄海について、著作、活動の両面から研究を行ってきた。そのような研究の過程で寺院資料に「師云はく」もしくは「先師の御物語に云はく」などとして、さまざまな「物語」が記されている事を発見した。真言寺院は伝授を中心として宗教活動が行われてきた場であり、貴族の有職故実伝授と同様に伝授をめぐる言談が行われていた事が予想される。また一方で寺院が多くの説話を育んだ中世文学の土壌であることは言うまでもない。従来は主に寺院における説話発生の要因を経典注釈中心に説明してきたが、本研究では口伝として記される小さな「物語」を蒐集し分析していくことで、説話発生のシステムを見なおしていくこととする。以上のような寺院における口伝と説話との関係を考える上で参照すべきものが、『江談抄』『富家語』『中外抄』などを中心に行われてきた貴族の言談・教命による有職故実伝授の研究である。貴族の側の言談については古くは歴史学の方から、竹内理三「口伝と教命－公卿学系譜（秘事口 伝成立以前）－」(『律令制と貴族政権第Ⅱ部』お茶の水書房、一九五八年）の指摘があり、また説話文学研究としての最初の言及は益田勝実の「言談の風景」(『説話文学研究』１５、一九 八〇年）によってなされ、それ以来多くの研究が続けられている。本研究ではこのような貴族社会における伝授を参照しながら寺院社会における口伝、説話を解明することで、『今昔物語集』などの代表的な説話集を中心に組み立てられてきた中世説話研究に新風を吹き込むものである。

（２）研究代表者はこれまでは指導教員をはじめ著名な学者が代表者を務める科学研究費補助金の調査･研究補助をしてきたが、定職を得ることができ、自らが中心になって調査・研究をすることが可能となった。本研究は、今後自らが中心となって調査を遂行する体制の基礎を作ることを目指すものである。調査・研究の基礎作りとして、まず必要な機材備品や 資料類の購入、収集を進め、天理大学に調査拠点を作り、その上で経蔵・文庫の全体像を把握し分析する方法論を確立する事で調査体制を構築する。

（３）本研究が対象とする寺院資料の口伝は摂関期・院政期を舞台としたエピソードである事が多いが、鎌倉期以降、平安時代、院政期を舞台にしたモチーフが再生産されていくという特徴は説話だけではない。擬古物語・和歌・謡曲・御伽草子においても同様である。本研究では〈昔語り〉の運用が観察しやすい寺院資料を中心とするが、この実証を梃子に鎌倉期以降の作品にとって平安時代や院政期のイメージにはどのような意味があったのか、社会にとって〈過去〉とは〈歴史像〉とは、どのような機能を持っていたのかを考察する。

２．研究の目的
本研究では、次の３点を目的とする。

（１）研究代表者は寺院における文献調査を中心に研究を進めてきた。そこで「師云はく」「先師の御物 語に云はく」として多くの「物」が書かれる事を発見したが、本研究はそれらを網羅的に収集し、 生成･伝授機能・蒐集を検討することで、中世説話研究に新風を吹き込もうとするものである。

（２）研究代表者はこれまで著名な学者が代表者を務める科学研究費補助金の調査・研究補助をしてきたが、この度定職を得たことから自ら中心となって調査できる体制の基礎を作ることを目指す。

（３）上記の２つの目的を統合するものとして、寺院の体系的・網羅的な資料調査から、単に説話 研究に留まらず、和歌や物語を含めた中世文学研究に新たな研究潮流を切り開くべく、その方法論を検討・模索することを最終的な目的とする。

３．研究の方法

（１）これまで研究代表者が調査に参加してきた寺院を中心に「師の御物語云はく」などと記載がある口伝資料を撮影し、データベースを構築する。撮影や入力に関しては随時 大学院生等に作業の協力を要請し、効率的に調査を進める。

（２）文献調査に必要な機材や文献などを購入し、自らが中心となって文献調査が進められるよう 調査拠点を作る。また寺院・文庫全体の把握に効率的な調査方法やデータベースのフォームなどを整備する。

（３）貴族社会での口伝の運用と比較する必要もあるため、歴史学や宗教学などの他の分野の研究の蓄積を参照する。より広い視野に立った分析を目指すため、資料とそれを成立させた社会集団の活動と連関させつつ、動的に読解していく。
　なお、本研究の基盤は地道な文献調査にあるが、資料点数が多く未整理なものも多いため、容易には進めがたい。例えば仁和寺塔頭蔵調査においては、いまだ番号整理の段階であり、今後長い時間をかけて地道に調査を継続していく必要がある。しかし勧修寺調査については、応募者が参加する勧修寺聖教・文書調査団がすでに１２年以上に亘って悉皆調査を進めているため全体像の把握や該当資料のリストアップなどを

効率的に行うことができる。２年で成果をあげるためには或る程度調査が進んでいる勧修寺資料のケースをベースとして分析を進め、それに他の寺院の例を組み合わせて全体像を構築する方法が有効であると考える。このようにすでに進められている成果を活用しつつ、周辺への調査対象を広げる手法によって、より着実に成果を上げるものとする。また寺院社会の口伝伝授の世界は或る程度貴族社会の有職故実伝授の世界と連動するものと仮定できる。すでに研究が進められている貴族社会の伝授の在り方と連動させて展開することによって、地道な資料調査を基盤としつつも考察可能な世界を中世社会全体に広げる事が可能になると考える。

４．研究成果

（１）資料調査および寺院資料における口伝・説話データの蒐集については、これまで研究代表者が調査を行ってきた寺院を中心として、多くの資料や事例に接することができ、一定の成果を挙げたといえる。

（２）調査拠点の形成についても、図書や調査機材の整備などについて、充分に進行することができた。安定的・継続的に調査を進めるための人材育成については、長期的展望が不可欠であり一朝一夕には進まない点もあるが、初期的な段階としてその充分な準備ができたといえる。

（３）平成２５年度には、学術論文「〔翻刻〕真福寺大須文庫蔵『袈裟表相』を発表した。真福寺大須文庫蔵『袈裟表相』は各種の説話を用いながら僧侶に袈裟を布施することの意義をわかりやすく説いたものである。この論文では、そのような性質を持つ新出資料『袈裟表相』の書誌、諸本を説明し、その全文を翻刻した。当該資料は儀礼との関わりを感じさせる面もあり、寺院において説話がどのような意義をもって機能していたのかを具体的に示す資料であるため、本研究の考察を大きく進めるものであった。

（４）また平成２６年度には、著書『中世真言僧の言説と歴史認識』(科学研究費補助金、研究成果公開促進費 255040）を刊行した。この著書では、寺院に所蔵される口伝・説話への視座を梃子として、説話文学史において、あるいは古典全般において、またそれを享受した日本文化において、〈昔語り〉にどのような意味があったのかを追求した。

これまで中世説話研究は『今昔物語集』などの代表的な説話集を素材に研究がなされてきたが、本書では寺院の聖教調査を踏まえ、寺院に残った口伝・説話から説話研究史を再構築した。その際、文学に関わりそうな資料を探してそれだけについて述べるのではなく、これまで研究代表者が取り組んできた勧修寺調査などの悉皆調査の成果を踏まえて、経蔵に収められた資料の全体像を把握したうえで、個別資料を位置づけるという方法をとった。それにより、個別の口伝や 説話をそれらが置かれた社会的・歴史的な文脈のなかで把握することが可能になり、中世説話の生成・伝授などをより広い視野から捉えることが可能となった。

また寺院社会における伝授を中心とした資料群の在り方は、貴族社会との連動が予想されるものである事から、この研究は中世社会全般における口伝、説話の意義や、それがもたらす社会における〈過去〉や〈歴史像〉の意義を考える事に繋がる。権門寺院に所属し文献に関わる多くの者が貴族階級出身であり、出家後も社会的交流を密にしていた事を考えれば、 知の伝授、法の伝授の作法も連動していたと考えるのが妥当である。口伝、説話の多くは過去のエピソードを伝えるものであり、それを編纂する形で説話集や伝記集は成立する。およそ〈昔語り〉を持たない社会集団は世界的に存在せず、〈昔語り〉は社会を成立させるために重要な要素であったと考えられる。一方で〈昔語り〉が盛んに行われる時期とそうでない時期があり、また〈昔語り〉の対象になりやすい時代とそうでない時代がある。権門寺院では、〈昔語り〉を盛んに行うのが鎌倉時代中期以降であり、〈昔語り〉の対象となる時代が院政期であった。〈昔語り〉には盛んになる時期の波があったと考えられ、そこから社会における〈過去〉や〈歴史像〉の意義を考える事ができた。かかる研究を進めることで、新たな視座から中世説話を歴史的に位置づけ直すことが可能になったのである。また鎌倉期以降、摂関期や院政期を舞台にしたモチーフが再生産されていくという特徴は説話のみに留まらない。本書では、〈昔語り〉の運用が観察しやすい例として寺院資料を中心に分析を進めたが、そこでの実証を梃子に鎌倉期以降の社会全体にとって〈過去〉や〈歴史像〉にはどのような意味があったのか、また文学作品にとって摂関期や院政期のイメージにはどのような意味があったのかを考察した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 １ 件）

① 佐藤愛弓、〔翻刻〕真福寺大須文庫蔵『袈裟表相』、『山辺道』査読無、55 巻、2014、31-40

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 １ 件）

① 佐藤愛弓『中世真言僧の言説と歴史認識』

勉誠出版、2015、720

６．研究組織
(1)　研究代表者
佐藤愛弓（sato ayumi）
天理大学・文学部・准教授
研究者番号：５０４６０６５５